

ゴール型ゲーム（バスケットボール）の構造特性とその身体に関する研究

発表者 霜村 裕樹

指導教員 日下 裕弘

キーワード：成立過程, 基本動作, チームプレイ, 身体感覚, コツ, カン, フィジカルハピネス, 身体の社会性, 成長

1. 緒言

バスケットボールは、J.ネイスミスによってアメリカン・フットボールとベースボールの中間的形態として冬季の屋内体育で競技スポーツのようなフィジカル・ムーブメントを楽しむために考案されたスポーツである。今日ではアメリカ国内のみならず多くの国々でプレーされ、夏季オリンピックの競技種目として採用されている。また、統制団体である国際バスケットボール連盟（FIBA）による世界選手権も開催されている。わが国の学校教育においても、新学習指導要領において球技のゴール型ゲームの重要な種目の一つとして取り扱われている。

本研究は、ゴール型ゲーム（バスケットボール）の構造特性を明らかにし、そこに生成する身体（感覚）のあり方を考察することを目的としている。

2. 分析枠組み～主として、チームプレイの関連から～

2-1 共振

主体と仲間それぞれの錯綜体が、身体の潜在的な部分で深く同調し、主体と仲間、道具、すべてが一体となったそのひと塊が、全体として動いているということである。

2-2 基本動作、下位動作、身体的思考（滝澤文雄）：紙面の都合上、省略。

2-3 大澤真幸の身体論

大澤によれば、身体とは、物たちの織りなす生地の中に編み込まれている限りでの、我々の在り方である。とりわけ、身体のような内在性の水準をもっとも純化した場合の身体の在り方を「原身体性」とよび、それが他者との間主観的な相互作用を通して形成されるより高次の身体のあり方を、「過程身体」と呼ぶ。

「抑圧身体」は、原身体的な平面の上でのこの過程身体の活動に他者がかかわることによって形成される最も初歩的な規範である。

さらに複数の抑圧身体を統合し、それらの抑圧身体を乗り越える高度な超越性としての「集権身体」が形成される。

集権身体は、最終的にその相対性を超克し、よりいっそう高次の社会的規範である「抽象身体」を形成する。抽象身体が形成されたことのもっとも重要な効果は、諸身体が個体として分離され、内部主観性＝主体性と呼ばれる領域が形成されることにある。それは理想形態として存在する。

3. ゴール型ゲーム（バスケットボール）の成立過程

1891年マサチューセッツ州スプリングフィールドのYMCA大学では、長い冬期の間、屋内体育で身体の鍛錬を目的とした旧来からの体操が行われていた。しかし、学生は身体の鍛錬よりもスポーツ

をする喜びや楽しさを求め、アメリカン・フットボールのような対抗試合での喜びを冬季の屋内スポーツで味わいたいと思いが募っていった。

そこで、J.ネイスミスは『新しいゲームはボールを使ったものになくしてはならない』と考え、「ゲームの難しさ」はボールのサイズに反比例すると理論立てし、最も適切な大きさであったサッカーボールを選んだ。

次に、アメリカン・フットボールのようなタックルをなくすために、ボール保持者を走ることを禁止し、身体の接触をなくしていった。そのため、パスを多用してゲームを進める展開になった。

次の問題は得点であった。J.ネイスミスは、幼少期の頃に遊んだ「雄鴨落とし」という遊びからヒントを得て、10フィート（305cm）のところに籠をつけて、そこにサッカーボールを入れて得点を競い合うことにした。

最後に、新しいゲームのルールをJ.ネイスミスは、一時間もたたないうちに書き上げ、バスケットボールという競技を完成させた。

こうしたバスケットボールの成立過程を探る中で言えることは、ルールの変化が常に新しい技術（基本動作）を生み出していることである。

4. 考察

4-1 身体の拡張

シュート、ドリブル、パスの動作はバスケットのボールが身体の中になじみ、組み込まれ、身体の一部になっていくことで洗練され、適切なシュート、パス、ドリブル、ピボットとなる。「ドリブルが手に吸い付くようだ」とか「シュートがゴールに吸い込まれる」などのドリブルやシュート時の身体感覚は、ボールが身体の中になじみ、組み込まれ、拡張し、また、身体が「あの丸いボールの世界」に組み込まれることによって生まれてくる感覚である。

コツとカンをつかんだその感覚は、フィジカルな幸福感である。

4-2 バスケットボールにおける「チームプレイ」の身体（感覚）～〈共振〉～

基本動作の習得が、チームプレイの潜在的な土台となる。パスや対人技術を成立させる条件には、基本技術の共有が欠かせない。

チームプレイを行う際、仲間や道具と一体化（身体が拡張）し、あたかもそうなることが予想されていたかのように仲間や道具、自分自身さえも動くという経験をする。たとえば、バスケットボールの試合で、プレイヤーが仲間にパスをする際に、彼はボールが今、手の中であって、どのくらいのスピードでどの方向に投げようかなどと、いちいち考えることはない。味方との「アイコンタクト」のようなもので、様々な錯綜体の中からベストの運動イメージとプレーを直感によってお互いに即

座に選択し、共振しているのである。

バスケットボールでのチームプレイの成立には、必ず敵チームの相手が存在する。相手はオフェンスであったり、ディフェンスであったり、いずれにせよ自分たちたちの壁となり対峙してくる。その壁をオフェンス側のチームは、ディフェンスの状況や反応を認知し、味方の身体図式の共振を通して、崩れていくことでチームプレイが生成する。そのためには、日ごろの練習から様々なチームプレイの錯綜体を作り上げていくことが大切である。

4-3 まとめ～身体の社会性～

1対1の、シュート、ドリブル、ピボットなどの基本的な動作を行い身体の拡張によって「あの大きなボール」を自分のものにしていくボール保持者の身体を、大澤は「過程身体」と呼ぶ。プレイヤーの過程身体はバスケットボールのコートにアフォードされ、ボールと遊び戯れる。

「過程身体」は、味方のプレイヤーとパスやスクリーンプレイなどのプレーを繰り返していくことで、1対1という他者を含んだ「抑圧身体」へと成長していく。さらに、その抑圧身体は、2対2や3対3といった少人数でのコンビネーションオフェンスへと繋がっていく。こうした連携プレーは、他者の存在を前提としている。他者とは絶対の差異であり、固有の宇宙といった根本的な外部性である。そして、それは一種のコミュニケーションでもある。そうしてできた他者とのつながりを「間身体的連鎖」という。

自らの身体がその中に生産した価値的なもの（チームプレイ）が、あたかもすでに客観的に存在していた規範（チームスピリット）であるかのごとく、身体の外部に投射し、身体の内部に引き出しとして内面化する。こうしたチームワークの身体を、大澤は「集権身体」という。

集権身体は他の行動場面では宙に浮いたまま、不安定である。規範（チームワーク）をバスケットボール以外の社会の中でも生かしていく必要がある。そこで、よりいっそう高次の先行的投射の形態である「抽象身体」を形成する必要がある。

大澤によればバスケットボールを通して、学習した規範（チームワーク）は、その集権身体をさらに超越し、抽象身体にまで高めていくことが必要になる。(図1)

5. 今後の課題

本研究では、バスケットボールの構造特性を分析し、そこに生成する身体（感覚）を明らかにした。しかし、身体感覚を文字で表現することの難しさのために十分な説明をすることができなかった。また、すべての生徒に抽象身体へ高めていくための方法についても触れることができなかった。

さらなるバスケットボールの特性の追求と指導のあり方を追求していくことが今後の課題である。

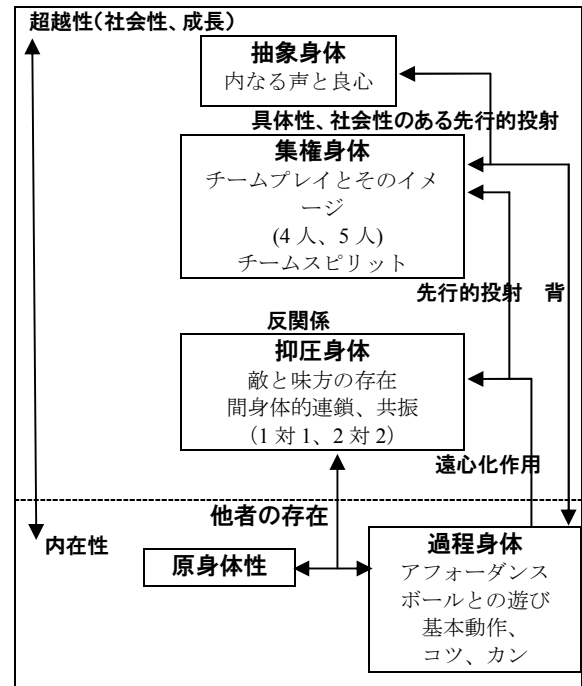


図1.バスケットボールにおける身体の社会性（技術習得と成長）

文献

- 1) バスケットボール指導教本 (2008) : 日本バスケットボール協会編、大修館出版、Pp. 339
- 2) 岩崎正義 他 (2009) : バスケットボール授業に関する実践的研究 (II) ～史実的視点による学習内容の構築 (<http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/989>)
- 3) J. ネイスミス著 水谷豊訳 (1989) : バスケットボール-その起源と発展-、日本YMC A同盟出版、Pp. 271
- 4) 金子明友著 (2007) : 身体知の構造、昭和出版、pp. 442
- 5) 大澤真幸 (1900) : 身体の比較社会学 I、勁卓書店、pp. 386
- 6) 佐伯年誌雄 (2006) : 現代スポーツを読む、世界思想社、pp. 292 - 294
- 7) 菅原論文 (1980) : スポーツ規範の社会学、不味堂出版、pp. 350
- 8) 滝澤文雄 (1995) 身体の理論、不味堂出版、pp. 1-229
- 9) 財団法人 日本バスケットボール協会 (2011) : 2011～バスケットボール競技規則、pp226